人権啓発ネットワーク大東機関誌　第13号　2018年11月

ぬくもり

編集と発行　人権啓発ネットワーク大東
〒574-8555　大阪府大東市谷川１丁目１番１号
電話 072-870-0441　FAX072-872-2268

非核平和事業

親と子で平和を考えるつどい

９月29日に、市民会館キラリエホールで「親と子で平和を考えるつどい」が開催されました。８月１日の平和バスツアー「ピースおおさか」・ヒロシマ記者事業の感想文の発表、大東市原爆被害者の会　上田会長の体験談、アニメ映画「クロがいた夏」の上映が行われました。また、会場にはヒロシマの被爆写真などを展示されていました。

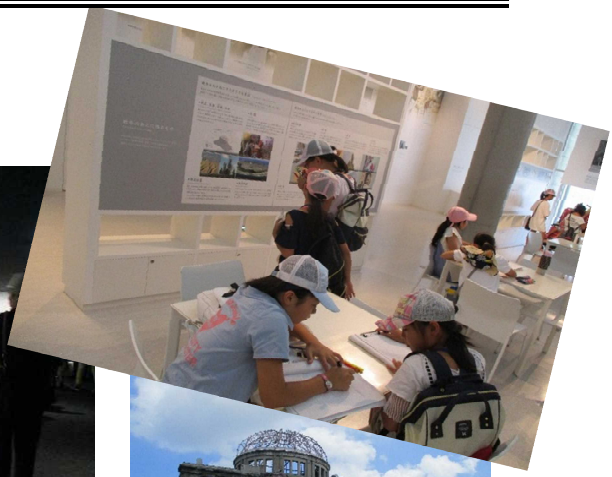
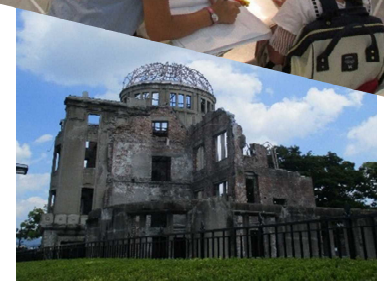
戦争を経験した人たちが高齢化していく今、戦争の悲惨さ、命の大切さ、平和の尊さを、若い世代へと語り継いでいかなければならない、そして、忘れてはいけないと思いました。

（レポーター　なっちゃん）

今回は、平和を考えるつどいの中で発表してくれた「平和バスツアー」・「ヒロシマ記者事業」の感想文を「ぬくもり」でも特別に掲載させていただきます。

ぜひ、ご一読ください。

平和バスツアー・ヒロシマ記者事業　感想文

平和バスツアー

平和と戦争

温水　こころ

わたしは、８月１日に平和バスツアーに初めて参加しました。

わたしは、平和や戦争について考えた事が一度もなくて、この平和バスツアーに参加し初めて平和と戦争について考えることができました。

わたしは、毎日ふつうに学校に行き、習い事に行き、ご飯をたべたり、ねたり、いつもそれのくりかえしですがそれはふつうじゃありません。わたしは、これのくりかえしですが、学校に行けない子や習い事にいきたくてもいけない子、ご飯がたべられない子、温かい所でねられない子、わたしたちは、このこと全部ができていてすごくしあわせ、これが平和なんだと思いました。

まずしいくらしをおくっている人々のぶんまで、わたしたちが大きいけがのないようにくらしたいと思います。

わたしは、なぜ戦争をしたのかなと思います。戦争をして、なにがいいのかわたしにはわかりません。

けど、命をおとしてまで戦争にいくっていうのはすごいことだと思いました。
戦争をしたからこそ、このいまの平和ができていると思います。
戦争にいき命をおとして帰ってきた人のおかげで、いまこういうふうに平和なくらしができていることに本当にかんしゃしています。

わたしは、こんごぜったい戦争をしてほしくないです。　それは、人がなくなるということがどんなにつらいか、どんなにかなしいのか、それのつらさ、かなしさ、こわさをしったからこそわたしは、戦争をしてほしくないです。
わたしは、この世界にうまれてきて本当にしあわせです。

※表記については原文のまま引用してます。

平和バスツアー

いろいろわかったピース大阪

西江　紗彩

私は２回目なんですがいろいろまなべました。　１つ目は楽しかった話です。バスの中で友だちの温水さんと話をしてどんどんおもしろい話をしてくれたのでうれしかったです。

２つ目は戦争の絵をみたことです。みた時に戦争で足や手がなくなってたり小さい子どもが病気になった絵をみて本当にこわかったです。あといっぱいつるがおってあったのですごかったです。　３つ目はえいぞうをみました。戦争を体けんした人のえいぞうをみて本当に戦争はこわくて、いろんな人が助けようとがんばったけど、なくなっている人がいてとてもこわかったし、戦争のときはごはんもおいしくないし、あまりなかったので本当に戦争はつらいなと思いました。あと、戦争にあった人はよくのりこえられたなと思いました。　４つ目は戦争のときにどこにひなんするかをたいけんしました。そこではばくだんがおちた音や色をたいけんできました。あと、ひなんじょがとても小さくて５，６人しか入れなかったぐらいなので、びっくりしました。それと空からおとすばくだんがものすごく大きかったのでこれが空からおちてきたらぜったいにこわいなと思い、もうそんなことはぜったいにおきてほしくないです。　５つ目はなくなった人にもくとうをしました。うまくつたわったかなと思ったけれど自分の気持ちをいえたのでよかったし、スッキリしました。あと、なくなった人がたくさんいて、つらい思いをした人もたくさんいて、かわいそうだなと思いました。　６つ目はさかをおりるときの戦争のえがありました。それは、火にかこまれて人がでられなくなっていてとてもかわいそうだし、顔が半分なかったのでそれが一番こわかったです。いまは幸せでぜいたくです。もうぜったいに戦争はおきてほしくないです。

ヒロシマ記者事業

広島記者事業について

前谷　佳奈

私は、８月５日から６日まで広島市と、呉市に、前川さんと木下さんと平岡さんと、私の家族で行ってきました。

原子爆弾でひ害を受けた人たちの血の付いたワンピースや服やズボンがてんじされていました。さびついた時計や三輪車、とけてかたまったビンのガラスや人のかげが残されていました。それらを見て私は「こわい」と思いました。戦争の苦しみを教わりました。

記念式典にも行きました。８時１５分　原子爆弾が落ちた時間に、かねの音を合図に、もくとうをしました。そのあとにおりづるを持って行きました。

私の心の中は、関係ない人たちが原子爆弾で殺されたことがかわいそうだと思いました。だからもう戦争をしたくないと思いました。

多文化共生・違いを認め、共に生きる

外国人と人権を考える地域集会に参加して

今年は、日本に住む外国人との共生を考えることがテーマ。区長のごあいさつの後、30 分ほどビデオを見て、その後に座談会で身近な経験や感想を話し合うというもので、ビデオはドラマ仕立てで３話。

人権擁護委員でもある座談会の座長さんは、「地域でも外国人の自治会加入が増えており、外国人の個別の文化や習慣の違い、宗教観がよくわからないという問題があります。今後、国の労働力確保の問題もあって外国人が増えると思いますが、身近なことで感じた経験談をお願いします」と発言を求めました。

（以下、参加者より）

◎「言葉が通じにくく、最近外国人が自治会を脱会した。」

◎「仕事柄外国人労働者の研修を担当しているが、彼らは日本人を怖がっており、研修が終わると自分の国に帰りたいと話している。自分の子が外国で怖いと思いながら研修を受けていると思うと、親としてどうだろうか。」

◎「会社で外国の方を雇用することになり、私が教育担当になったのですが、会社からのフォローなども特になく、困ったことがあります。」

◎出席していた先生から「学校では人権教育の一環で、外国の人が民族衣装を着て、子ども達に食べ物や文化のことを話していただいている。」と話された。

◎「ビデオのようにうまくいくとは限らない。市内でも外国人が増えて、相互理解にお互いの歩み寄りが必要だ。外国をよく知ることが国際社会への一歩で、ヘイトスピーチは禁止を明確にし、お互いがもっと勉強するべきだ」

あらすじ

１話は、住宅街で、最近越してきた外国人世帯が生活上のルールを守れないことを巡ってトラブルになりかけたが、お互いの会話によって誤解が解け、家族ぐるみの付き合いに発展していく。

２話は、日系ブラジル人３世が工場で働き始めるが、言葉が通じにくいことから、外国人労働者に職場の疑惑の目。ところが仕事中の先輩の事故を契機に日本人の職場仲間と誤解が解け、仲が良くなっていく。

３話は、在日韓国人の中学生が、ヘイトスピーチの存在を知ったことから日本人が怖くなり、家庭にこもるようになるが、級友達の励ましによって再び元気に登校する。

これらの話を受けて、座長から「特定の国を排除したり危害を加える主張は誤り。他の国の文化を理解した付き合い方が必要ではないか。日常生活の中での私たちの生き方が問われているのかもしれません。多文化社会の中で共に生きるという街づくりを進められたらと思います」とまとめられました。

わがことながら、自分の勝手な価値観で外国人の固有の生活の歴史を知らないで、「外国」をひとくくりにして文化や宗教を決めつけてしまう、自身の恥ずかしさを思い知らされた地域集会でした。　　（レポーター　松ちゃん）

となりの活き生きサン

ここでは、大東市の人権推進につながる
取り組みを行っておられる方々や団体の紹介をさせていただきます

大阪産業大学　ボランティアサークル「VIPLIFE」

今回は、大阪産業大学の、学生ボランティアのサークル「VIPLIFE」の代表をされている、中林凌（りょう）さんにお話を伺ってきました。

VIPLIFE では主に**「障がい児と一緒に遊びに出かける」**外出イベントを月に一度のペースで行っています。大東市の「NPO 法人あとからゆっくり」や他大学のボランティアサークルと協働し、外出イベントの企画運営や年に一度のバザーでの出店、障がい児の親が行っているイベントへの応援など、子どもたちを中心にした活動に力を入れています。

VIPLIFE の活動で、大切にしていることは？

中林さん：子どもたちの中には、コミュニケーションが難しい子もいます。パニックなどで予定通りに進まないこともあるんですが、そこには子どもたちの要望などメッセージが隠されていて、それをどうキャッチできるか。要望を無視せず、解決してから元の予定に戻るということが出来るように気をつけています。

印象に残っているエピソードはありますか？

中林さん：天王寺動物園に遊びに行ったとき、ひとりの子がみんなのお昼休憩を待ちきれずに飛び出してしまった。そのまま動物園横の博物館に入場料も払わず入ってしまったとき、強引に外に出てもらう、という対応をしました。今振り返るともっといい方法があったのでは、と思い印象に残っています。他には、なかなか意思疎通の難しい子の障がい特性なども徐々に分かってきて、仲良くなっていくと、「ありがとう」と言い、名前を呼んでくれたんです。普段人の名前を呼ぶような子ではなかったので、本当にうれしかったですね。

今後の展望など

中林さん：VIPLIFE の活動は大変な面も含め、楽しいです。関わりの中で出来ることが増えていったり、うまく接することが出来るようになったり。なかなか新しいことにはチャレンジできていないですが、子ども食堂などにも、「子ども」にこだわって展開していきたいです。

（レポーター：卓ちゃん）

市民・会員交流フィールドワーク「鳴門市ドイツ館」「鳴門市賀川豊彦記念館」

６月 22 日は朝から快晴。徳島は案外近く、昼食に海鮮料理を食べて正午過ぎには道の駅「第九の里」に併設される「ドイツ館」と「賀川豊彦記念館」に到着しました。

「**ドイツ館**」は「板東俘虜(ふりょ)収容所」跡地にあります。第一次大戦で中国の青島(ﾁﾝﾀｵ)で俘虜（捕虜）を捕らえ、その内約千人が過ごしました。当時の松江所長は旧会津藩出身で、捕虜に対して人権を尊重した扱いをし、また、地域住民も、進んだドイツの技術や文化を取り入れようと、牧畜・製菓・西洋野菜栽培・建築・音楽・ｽﾎﾟｰﾂなどの指導を受けました。

収容所には楽団もあり、市民を招いてｺﾝｻｰﾄも開かれました。そしてちょうど 100 年前の６月、ﾍﾞｰﾄｰｳﾞｪﾝの交響曲第九番をアジアで初めて全楽章演奏しました。「第九」は「歓びの歌」ともいい、「寛容」「全ての人が兄弟」「平和」そして「生きる歓び」が込められています。これこそが、ドイツ人捕虜が感謝と共に伝えたかったことなのです。信頼しあうことによって、言葉や文化の違い、国や立場を超えて生まれた「板東の奇跡」なのです。このことを記念して現在、鳴門市民が毎年６月に第九を演奏・合唱するに至っています。

続いて、道の駅をはさんで建つ「**賀川豊彦記念館**」へ。賀川氏は第二次大戦前後の関西にも深い縁があり、神戸のスラム街の救済に尽力し、労働運動、普通選挙権運動、農民運動と様々な活動をし、また、消費者のための生活協同組合運動に取り組み、神戸生協を大成させます。戦後は、戦争のない世界平和を求めて世界連邦国家建設運動、核兵器廃絶、憲法擁護運動を行い、ノーベル平和賞に４度も推薦されました。「友愛・互助・平和」のために生涯を捧げたこの人物について、もっと深く学びたいと思いました。

人権についての学びはもちろんのこと、参加者同士の交流も嬉しい一日でした。「大東市に来たばかりですが、優しい方々に出会い、ご親切に色々教えていただきました。」という感想がとても印象的でした。来年も楽しみです。　　（ﾚﾎﾟｰﾀｰあき）

人権啓発ネットワーク大東

Facebook も更新中！ぜひご覧ください☆